

## 創業時の苦難と挑戦

苦難の連続であった創業期を乗り越えて、発展し続けてきたデンソウ。社是に込められた「より良い社会のために尽くす」という想いは、創業時も今も変わらないデンソウの原点です。そして今、デンソウは第二の創業期を迎え、CASEへの取り組みやカーボンニュートラルの実現などこれまでにない難題に果敢に挑戦していくことが求められています。改めて社是に込められた想い、そして原点に立ち返り、社会と人々の幸福に向け、また一步、歩みを進めます。

1935年

### 電装品内製化の挑戦

道具もない。設備もない。血の滲む試練の時だった。だが、必ずやれる。俺たちがやってみせる。

1933年、株式会社豊田自動織機製作所（現株式会社豊田自動織機）に自動車部が設置され、1935年に当時、同社常務の豊田喜一郎氏が鈴木隆一（後のデンソウ取締役）に電装品内製化を指示しましたが、開発は困難を極めました。そこで、喜一郎氏は当時まだ電装品は品質的に安定しておらず、量産を推し進めるべきではないとの考えから、鈴木に対し、「私が考えていたより電装品開発はずっと困難なようだ」「この際内製化をやめたいがどうか」と伝えます。鈴木は「何としても継続したいのでもう1カ月お待ちいただきたい」と懇願します。その後、若い技術者たちの熱意と執念の結果、車両への電装品の正式採用にこぎつけることができたのです。



電装品開発担当者  
当時約30人の技術者・技能者たちが寝食を忘れ内製品開発に没頭した。

### 分離・独立後の創業当時の取り組み

**電気自動車の開発**  
1950年、BEVの生産を開始。走行可能距離は1回の充電で195km。

**電気洗濯機の開発**  
1950年、ドラム回転式の電気洗濯機を発売。一時は販売台数1千台/月に達し全国第1位の売上を誇った。

**設備の近代化**  
1952年、総額1億6,000万円の設備購入を4カ月で決断。（当時売上高は11億4,800万円）



1949年

### 「日本電装」誕生

たとえ、道がなくとも自分たちでつくる。そして、がむしゃらに進む。

GHQが進めたドッジ・ラインにより景気が極度に悪化している中、1949年に電装部門は分離・独立を迎えます。デンソウ初代社長の林虎雄は、日本ひいては海外でも飛躍できる企業を目指し、「刈谷電装」でも「愛知電装」でも「東海電装」でもない、「日本電装」という社名で独立に向けての決意を示しました。日本電装の船出は、財政不況の最中、資材も設備も十分でもない傷だらけのものでしたが、社員の結束は固いものがありました。

1950年

### 労働争議を経て労使で一本の道を歩む

“最上の品質、最低の原価”に挑み  
業界第一の会社になろうと全社員が一丸に。

分離・独立後も経済の混乱は続き、1950年、ついに会社再建案を発表することになりました。当時取締役であった岩月達夫（後のデンソウ社長）は「船は難破しかかっている。この船を何とか沈ませないために会社側の提案をのんでほしい」と述べ、当時の社員の約3分の1に相当する473人の人員整理が行われました。また岩月は、「日本電装はつぶれるか」という衝撃的な表題を社内報に掲載し、「このままでは国内市場を守ることすら難しい」と伝え、「業界第一の会社となるよう、最上の品質、最低の原価で戦っていくしかない」と社員に語りかけたのです。そして29日間にわたる労働争議を経て構築した労使相互信頼により、全社一丸となって最高の品質と徹底した原価低減を目指した経営基盤づくりが始まりました。



### ボッシュからの学びを活かした取り組み

**ヒトづくりの原点**  
1954年に中学校卒業者を対象とした3カ年の技能者養成所を設立し、「モノづくりはヒトづくり」を体現していった。

**基準・規格づくり**  
ドイツ語のボッシュノルム（生産・経営管理まで含む厳格な基準）から、デンソウ独自の設計基準DDS（DENSO Design Standard）をつくり上げた。

**サービス網の構築**  
1954年、サービスステーション網の整備に着手。各地のエンドユーザーへのサービス向上を図った。



1953年

### ロバート・ボッシュとの技術提携

「日本電装なら間違いなし」  
お客様から信用していただける会社になる。

その後、朝鮮戦争による特需によって経営は息を吹き返しましたが、欧米に比べると技術の格差は歴然としており、早急に国際レベルの技術・品質を実現する必要に迫られていました。そんな折に出会ったのがロバート・ボッシュです。当時のロバート・ボッシュの会社規模はデンソウの10倍以上でしたが、三島徳七博士（MK磁石合金の発明者）の仲介や川真田和汪氏（株式会社トヨモータース社長）の推薦、さらに当時の経営陣の熱意と機敏な対応により、技術提携にこぎつけることができました。そして、ロバート・ボッシュに学びながら国際水準の技術・品質・事業基盤の確立を進めました。

### 1956年 社是の制定

当時1,450人の社員のうち、約4割が分離・独立後に入社した社員となり、これまでの苦難の道のりを知らない社員も増えていきました。そこで、デンソウの存在意義と社員のあり方を明確にするため、公募で集められたアイデアをもとに社是が制定されました。